
白騎士物語 力は一体何の為に... in 真恋姫 リメイク版

焰 人道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白騎士物語 力は一体何の為に… in 真恋姫 リメイク版

【Nコード】

N3454V

【作者名】

焰 人道

【あらすじ】

どんな才能があっても、どんなに努力しても、最後には自分は無力だと思い知らされた。大切な人達を失い、決意を固めた自分でも、忌むべき物に対して何一つ出来無い…そんな時、世界を変える強大な力を手に入れた。そこから始まる、一人の青年が歩んだ物語…

この小説をお読み頂く皆様に

まず最初に…

この小説は、作者のパソコンがブチ壊れた為に、新しく設定をちょこつと（多分かなり）変更してリメイク版として投稿しました。

今まで小説が投稿不通で、皆様に本当にお騒がせしました……

しかし、まさかパソコンがぶっ壊れてオシャカになるなんて——
トホホ…

パソコン買うのにバイト死ぬ気で働いてやっと買えました。

それに加え夏休みの宿題に追われて不定期になるかもしれません。

度重なるご迷惑本当に本当に、申し訳ありません。

ブローグ イサード・ヴェン＝イシュリ

——ある国の外れにある一つの小さな村があった

その村は外れにあつたが故に他の国や村にもこの村の存在を知っている者は殆ど居なかつた。

それ程人知れず外れの村だつた。

しかし、その村の中には人々の明るい笑顔に何時も包まれ、村の住民達は村の皆一人一人を家族の様に慕い合い支え合つたと言つ。

それ故に村人同士での争いは決してと言えるほど起こる事は無かつた。

誰にも認識されなかつたこの村だが、人との『繋がり』は何処よりも固く、強かつた。

その村の中で走り回る子供達に混じるこの一人の男の子もまた、この村の一員かぞへだつた。

普通の子供の様に、遊び、学んで、両親の温もりを感じながら成長

していくと――

その男の子もまた、此处で皆と平穩に生きていくのだと…

そう――思っていた。

…そう、思っていく――筈だった。

――時は過ぎ去り、とある場所

ある一人の青年が下を向きながら一点を見詰めていた。

その青年の手には白い花で飾られた花束が両手に握られている。

青年の立っている周辺の風景は桜の様な鮮やかで綺麗な花を咲かせた木々が辺りを囲み、心地良い風によって散らす花弁が周りを魅了する様に彩っていた。

その花弁は規則正しく整列している多数の石に不規則に落ちていった。

その石達には一つずつに何か文字の様なものが刻まれていた。

青年は列の一番上にある石の目の前に立っている。

「……………」

石を見詰めていた青年は屈み込み、両手に持っている花束を置く

それを無言のまま行う青年だが、その表情は心なしか笑っている様に見える。

青年が放つ視線の先には何かが刻まれている石に向けられていた。
青年は再度その刻まれた文字に視線を送る。

「——父さん、母さん…久しぶり」

此処に来て初めて口を開く青年

口から出た言葉と共にその表情は心なしの笑みから少年と見間違える様な純粋な笑顔を浮かべていた。

青年がこの時をとて喜んでいる様に見て取れた。

「え、えつと…いきなりの事、なんだけど……俺さ、今度から部隊の隊長を任される事になったんだ…」

続けざまに口を開く青年

だがその事を口に出す瞬間様子が変わり、先程の笑みではなく言葉を詰まらせて下を俯きながらブツブツ話す今まで見た限りでは別人の様な青年がそこに居た。

その様子はまるで親に報告するのを恥かしがる子供そのものの

その後青年は何かに気付いた様に反応した後、頭を左右に凄い勢いで振った。

何かを振り払った青年の顔は前の様な笑顔に戻っている。

「あ、あと他にも話す事がいっぱいあるんだ。えつと……」

言いたい事が山ほどあるのか何から話せば良いか考える事を急ぐ一

人の青年

その表情は本当に『青年』とは思えない、親の温もりを大切にしている純粹な『少年』の様な表情だった。

その後の青年は話題を変える毎に青年は様々な表情を浮かべ、それを慌てて元の表情に戻すの繰り返しだった。

青年は心の底から楽しみながら、他愛のない話を時間が許す限り続けていった。

「——って、もうこんな時間……！？話しすぎたな……」

それから数刻が経ち、かなり話し込んだ青年は空に映る夕暮れを見てやっとこさどれだけ時間が経ったか刹那で理解し、目を見開いて驚く

心の中でずっと話しっぱなしの自分を少し責めて、両親にも謝罪を入れた。

青年はその後まだ此処に居たそうな顔をしていたが、花束の花を分けて石の周りに飾り、瞼を閉じながらスッと立ち上がった。

暫く立ちながら笑みを浮かべ石を見詰めるが、それを境に一変、突

如青年の表情は変わる。

「俺…決めたんだ。今でも続いている人と人との争い、そのせいで今も大切な存在を失ったり、傷ついたりして悲しむ人達を、助けるって…」

突然変化したその顔は真剣な顔その物だった。

今まで笑ったり、恥かしがったり、慌てたり等、微笑ましい表情を見せていた青年が此处で初めて見せた表情だった。

『純粋な少年』から『悲しみを背負う青年』へと変わった瞬間だった。

「一人ではそんな事無理なのかもしれない、無謀なのかもしれない……でも、あの光景を思い出すと、もう争いのせいであの様な悲しみを誰かに味わわせたくないんだ——」

普通の青年が言える筈もない言葉

しかし、今日の前に映っている青年はそれを経験したかの様に言っている。

真剣な面持ちの青年の目尻には涙が溢れていた。

その涙は何を表わしているのだろうか？

「——だから…俺は自分を穢してでも争いを終わらせる……終わらせたいんだ。

誰かが傷付くなら、俺が傷付けば良い…最悪それで俺が壊れようとも……」

目に溢れ出た一滴の滴を流し、潤んだ声を抑えようと喉に力を入れながら話す。

それでも抑えを振り切って流れる滴は、青年の心の乱れを物語っていた。

「——俺は、後悔しない……これが俺の進む覚悟だ」

青年は心に秘めていた思いを話し切った。

話し切った後、この空間から少しの余韻が残り、花卉が青年の視界を少なからず覆う。

そして、その余韻が終わったとほぼ同時に青年が口を開く

「だから……父さん、母さん

——ごめんね……ッ」

最後に言った言葉は、謝罪だった。

ただ一言、謝った。

決してふざけているのではなく、こんな事を選んでしまった事に謝っていた。

ただもう我慢できずに流れてくる涙と湧き上がってくる嗚咽を抑えるのに必死でたった一言しか謝れなかったただけなのだから……

青年は一度吐き出してしまった我慢を全て流し切る為に泣き続けた。

一人の青年が決めるには重すぎる覚悟を固める為に、両親への懺悔の為に、それらを拭うまでは青年の涙が止まる事はなかった。

青年が泣き続ける場所には今でも花弁が舞い散っている。

花束を分け、石に飾った花も、風の勢いに任せ揺れ動く。

気分屋な風は突如として少し強めの風を吹かせ、青年の前にある石にかかっていた花弁を吹き飛ばす。

花弁が飛んで露わになったその石にはこう刻まれていた。

——イサード・ナルサ＝ファスト

——イサード・マシス＝エクレナ

此処に眠る——

この日を機に青年は本当の自分を見せる事は無かった。

たった一人で成すと決めた青年は、誰にも頼らず歩みを始めた。

自分を犠牲にして歩む先に、忌むべき争いの終結を成す為に…

青年の名は、イサード・ヴェン＝イシユリ

孤独を決め込み、心に仮面を覆い、争いに囚われた青年
悲惨で残酷な過去を経験した。心が壊れた男の子

此処から、青年^{ヴェン}の物語が始まる。

ブログ イサード・ヴェン〼イシュリ（後書き）

ブログにて出来るだけ伏線を張りまくりました。

更新遅すぎて少し不味い感じがある様な……

始まりの場所（前書き）

も、申し訳ありません…

諸事情により、3か月以上に及ぶ長期投稿停止になってしまいました。

いくら不定期になると言っただとはいえ、此処まで長引いてしまいました。

本当に、真剣に、純粹に…スイマセン

始まりの場所

例え自分が苦しもうとも

例え自分の手を汚そうとも

例え、それで心が穢れようとも

誰かを救う事ができれば……—

皆が喜怒哀楽に、人が持ち得る豊かな表情で幸せに……
望むならその殆どが明るく楽しく笑ってくれれば……—

『俺』が人として決定的に何かが欠けているのだとしても、壊れてしまったのだとしても

『俺』は『あの時』事を繰り返さない為に——

『俺』に捨てる物なんて何も無い、捨てる物も無い、ただ自分が汚れていくだけ…

——ただ、ただそれだけだから……——

時刻は恐らく深夜を少し過ぎた頃

今映る情景には本当に存在するのかわからない様な——真っ黒で何も無い空間があった。

そこは何処かすら確認出来ないほど全体を黒で塗り潰された様な、
そんな空間

辺りには誰も居ない

音も無い、光も無い

唯一何も無い空間が表している色は――黒

ただ周りが黒で覆っているだけ――

いや、少し訂正しよう

その空間の中で一つ明らかに黒とは異なる何かがポツンと色彩を放
っているものがあつた。

まるで闇の中に『光』が迷い込んだかの様にそこに一つ存在してい
る。

道の見えない場所で、光を探そうと彷徨さまよっている様な…

その『小さな光』は一つの人影だつた。

誰も居ない筈の空間に一人の青年はそこで…独り立っていた。

——此処は何処だろうか…？

その異質な空間で一人立っていた青年の意識はふと急上昇して意識を取り戻す感覚を覚えた。

その順序に従い、ゆっくりとその目を開き、その瞼の下に隠されていた翠色の瞳が姿を表した。

「んっ、んうゝ…はぁ……」

青年は起床した時の虚ろな意識でだるいとも新鮮とも例える様な何とも言えない気持ちで腕を上に向けて、思いつきり背筋を伸ばす。

一気に脱力した際に無意識に出た声は不思議と体のスイッチが切り替わるように青年の意識を覚醒していった。

この一連の行動はまるで寝起きの時の様だ。

何故か横になっていたというわけではなく、立っていたのだが…

「…ここは？」

ある程度時間が経ち、やっとこさまともな行動が可能になるまで意識を取り戻した青年は、目覚め始めてから突然力が抜けた足腰を踏ん張りながら、無意識に首や腰を回して360°見渡した。

状況を確認する際の人の性質なのだろう。

しかし、青年の見渡して映し出した視界は、一面真っ黒を示したまままで此処が何処だかは元より、何も分からなかった。

寝ていた感覚だったのに何故立っていたのかは今ではさて置き、確認し終えてそう断定すると、寝起きのしゃがれた小さめの声で呟く

「恐ろしい事に黒、黒、黒で何も無い、何も見えないな……夢、って事で良いのか…、これ…？」

呟いている間にも意識が覚醒しつつある青年は、余りに異様な光景が広がっているのにも関わらず、特に気にした様子も無く軽い口調で此処での感想を述べる。

まだ寝惚けて頭の整理がつかないだけなのかもしれない

「確か…いつもの様に仕事して、寮に帰って、風呂入って…そのまま寝てしまったって事は——夢って事で良いな、うん」

ただ、今まで経験した事の無い状況だったので、一応此処に居た前を振り返り、最後に寝た、という事を再確認した結果…此処は夢だという結論に至った。

ただ、もし夢だとしても、何時まで経っても何も起こらず黒を示したまま

この空間を前にして夢と済ませる青年も青年だが…

青年は疑問顔で頭を掻いた。

「まあ、このまま立つても俺が目覚めますまで此処に居る事になるからなあ…流石に夢だから何処かになんかあるでしょ。そうと決まれば…うん歩こう、そうしよう」

こんな時にえらく前向きな青年は、折角だから楽しもうという一時の冒険心に動かされ、何も無い空間で静かに一歩前に踏み出し、歩きだした。

何処も行く場所も、道も、示すものも何も無いというのに

しかし、青年は何かを感じた様に、導かれた様に、何も迷わずに黒の空間を突き進んだ。

その進む方向の先に何を感じたのか——青年^{ヴェン}は、無意識にその足を速く進めた。

「——何で、なんでなんだよ……なんで……」

ヴェンが歩き始めてからある程度時間が過ぎた。

こんな所にも何かあるはずだと心の中で希望を抱いていたヴェンは、

先程までは新しい発見に心を踊らされ、意気揚々と満面の笑顔で歩いていた。

それはもう、ステップを踏まんばかりに

つい先程も言った通り、何にも無い夢だと認識していたヴェンは、自分自身で『周りに何も無い位だから奥に物凄い物が隠されているに違いないッ……ハズだッ！』と勝手に解釈していた。

『ハズだッ！』の前の妙な間はなんだったなのかは分からないが…

其処まで勝手な解釈が出来る人も珍しいだろう。

その上の楽観的な思考、タチが悪くてしょうがない

そこまでヴェンはこの夢の展開に（勝手に）胸が高鳴っていた。

二度言うようだが、先程までは

そう、（三回も言うようだが）先程までは

ヴェンの思っていたのとは現実は違う様で、何時まで歩いても何も見つからないし何も無い

もう一度言う、何時まで歩いても何も見えない、何も無かったのだ。

誰もが（ヴェン以外）分かっていた結果だった。

しかし一方のヴェンは、冒険心に満ち溢れて実行に移しただけあって、頑張って歩き続けて見えたものが前と同じ一面が真っ黒という、希望も冒険心も打ち碎かれる結果となってしまう、ショックの余りで上記の発言と同時にヴェンは膝から崩れ落ちた。

所謂orzポーズ、というヤツである。

そこからまた時間が経って、ヴェンはおぼつかない足で立ち上がった後、まるで今まで想いを抱いていた女の子から見事なまでに玉砕した男の子の様に、下を俯きながら、一歩踏み出すことに体が重心に引かれ、ユラユラしている歩き方で延々続く道を歩いていた。

否、失恋した男子というより貞。みたいな歩き方の方が正解かもしれない

そこまで凄まじい勢いで落ち込んでいたヴェンは何かブツブツ呟きながら暫く歩いていた。

理由は無い、ただ打ち碎かれた心に穴が空いて、放心状態なだけである。

しかし、今のヴェンの姿は最早一種のホラーだと思うのは気のせいだと思いたい

「ハハハ……グッバイ、俺の冒険心……綺麗に華麗に片鱗残さず消え去ったよ……」

負のオーラが漂っているというよりも撒き散らしているヴェンは、聞いている此方が鬱になる様な言葉をブツブツと吐いていた。

縦線が見える、負のオーラが『負』の言葉だけで形成されている、生気が無い……等

一見アニメの様な表現描写が随所に、余す事無くヴェンが再現していた。

本当に此方も鬱になりそうである。

「もう目が覚めても頑張れる気がしないよ……ボロボロだよ……そこらへんの布切れよりも酷いよ——へぶッ！」

それからまたしばらく周りの黒よりドス黒い雰囲気を感じながら歩いていると、突然何かにぶつかった。

上記の行動の途中だったので勿論前なんて向いていない、視界は常に下、ましてや全くの無防備だったので盛大に額に激突、余りの痛さに額を押さえてその場にしゃがみ込んだ。

「——う、うう……ぐっ……っ、こつまでし、して……神様は俺がき、嫌いか……」

ただ単純にヴェンが前を見ていなかった自業自得からきたものだと言うのに先程の鬱もあってか、半ば八つ当たりな言動と共に恨めしい目で事の元凶の犯人を見る為にゆっくりと上に顔を上げた。

その目に映った光景は——

「——う、うおおおお！？な、何か建物があるぞおお——」

ッ！？」

黒い空間に対になるかの様に聳え立つ、白い宮殿だった。

その時ヴェンの興奮が最高潮だったのは前の反動から来るものだろう。

光の無い場所で確かにその宮殿は輝きを放つ

——まるでこの青年^{ヴェン}を待っていたかのような、そんな感じがした。

何故唐突に現れたのか、そんな疑問が浮かんでくる中
一方のヴェンは全然そんな疑問など片隅にも置かないで、宮殿の中
へと走り出した。

始まりの場所（後書き）

ははは… 相当時間がかかりましたね、 たかだかこの量の文で……

次回の投稿もどうなるかはわかりませんが、 出来るだけ頑張るよう
にします。

断言できないのが非常に悔しいですが…

主人公プロフィール

名前：イサード・ヴェン＝イシュリ

性：イサード 名：ヴェン 本名：イシュリ

年齢 16歳

身長 162cm 体重 43kg

一人称：俺（僕）

プロフィール

白騎士物語の世界で主人公のレナードの最初の舞台となったバルンドール王国で14歳の時、王国史上最年少で王国軍の兵に就いた青年ヴェンの両親は自身が7歳の時に他界している。

両親が他界した後、孤児院に入り、8年後王国の兵士となった。

主人公のレナードとは友人関係にあり、幼い頃に周りとは疎遠状態だったヴェンにレナードが積極的に話し続けて、半ば強制的に降参させて友人になったのがきっかけ

本人は最初、迷惑がっていたもののレナードの優しさに触れて次第に自身も友として心を開くようになり、謎の組織『ヴィザード』の王国式典襲撃の際、レナードが王国の地下宝物庫にて古代文明の決戦兵器『シンナイト』の白騎士の力を覚醒させ、王国の危機を救っ

たもののバランドール王国国王の愛娘『シズナ』がヴィザードによって攫われ、まだ青年のレナードにシズナ救出任務を頼まれ王国を離れようとした時に、今までレナードから一方的に友人関係になった時の心情を本人に直接話し、感謝の言葉と共にこれからも友としてレナードに尽くす事を心に誓った。

ちなみに余談だが、その際の時にレナードから“もう友達じゃなくて親友だろ”と昔の様にまた勝手に宣言しだしたのを聞いたヴェンは心から嬉しかったらしいが必死に素っ気無い態度を作って照れ隠しで頬を赤らめていたことからツンデレ傾向がある。

兵士に求められている戦闘能力の方の面は一般のソレとは遥かに卓越していて隊長クラスでも数名を相手どれる実力を持つ

武術では一般の兵士と同じ剣や槍の他に東方に伝わる、刀等も扱える。

性格は上記の通り幼い頃から人との交流を拒絶していて、他人にも自分にも興味が無い（勿論レナード以外）、仕事以外の事にはやる気を出そうとはせず、何時も無気力、無関心、脱力で日常を過ごしている。

それ故にヴェンと交流があったのはレナードとその友人の一人のユウリ、その他に仕事上で一緒だった数名の軍関係者と、何故だかは不明だがバランドール王国国王にして王女シズナの父親にあたるヴァルトス国王とも繋がりがあった。

性格に依存させると一見無口そうだが、私情と仕事はちゃんと割り切っているので仕事の関係者から見れば普通の認識として見られている。

冷たい印象も見られるが、心はとても優しく、人の命が侵されたり、奪われたりと、誰かの『幸せ』を傷付けられている場面に遭遇すると激しく怒り、自分の命を二の次にしてまで救おうとする。

心を閉ざしてしまった理由については、ヴェンの過去に原因がある

と思われる。

本当のヴェンは純粹で少年の様な性格だとレナードが語っていたが彼以外誰も見た事が無いので真偽かどうかは定かではない。

例外として自分一人の時だけには素の自分を見せている。

容姿は耳までかかる長めの明るい茶色の短髪に二重の大きな黒目、
体格は一般の青年には珍しく華奢でヴェンとしてはもう少し筋肉が
ついてほしいと気にしている。

この容姿と身長と相俟って同い年でも年下に見られる事がよくある。
それについてはヴェンは激しく気に入らないらしいし、『小さい』
なんて言葉もヴェンにとってはほとんど禁句である。

主人公プロフィール（後書き）

めっさ長いですが一応紹介という形でプロフィールを作りました。

ヴェンが何故夢らしき場所で興奮していたのかはこれで解決（？）しましたね。

大体リメイク版前のものを知っている人達にはヴェンの『過去』についてはモロバレですね。

次の紹介ではヴェンの『力』等について紹介したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3454v/>

白騎士物語 力は一体何の為に... in 真恋姫 リメイク版

2011年12月3日19時47分発行